

[博士論文審査要旨]

申請者：中村 智彰

論文題目 監査技術の観点からの監査プロセスの硬直化と監査の失敗

審査員 福川 裕 徳

島 本 実

佐々木隆志

本論文は、財務諸表監査がなぜ失敗するのかという問いを、監査技術の観点から探求することを目的としている。この探求を進めるにあたり、本論文では、まず現在の監査実務において、さまざまな形で合理化・マニュアル化が図られていること、そしてこの合理化・マニュアル化には監査の有効性・効率性にとってメリットとデメリットの両方があることを指摘している。特に合理化・マニュアル化のデメリットとして監査プロセスが硬直化すること、また、監査プロセスが、監査目的からその手段である監査技術の選択・適用を考えるという本来あるべき流れではなく、監査目的を明示的に考えることなく監査技術の選択・適用から監査目的が達成されていることを確かめようとする逆の流れが生じることを論じている。さらに、証憑突合、確認、分析の手続という3つの重要な監査技術を取り上げ、それらが問題となった監査失敗の事例の分析を通じて、この議論の妥当性を確かめている。

事例分析の対象として取り上げた McKesson & Robbins 事件、ナナボシ事件、WorldCom 事件のいずれにおいても、監査プロセスが硬直化するとともに本来あるべき流れとは逆の流れとなっていたことが監査失敗の主要な原因の一つであるとの結論が導かれており、さらに、こうした監査失敗を防ぐには、監査技術の前提を疑うこと、および、監査技術と監査要点との関係を再評価することが有効であり、これこそが監査人の職業的懐疑心の発揮の一形態であるとの見解が示されている。本論文の優れた点として、以下の2点が挙げられる。

第一に、監査失敗の原因を、監査技術およびそれと監査目的との関係の観点から分析していることは高く評価できる。この分析の視点は新規性を有しており、また興味深く重要な知見がそこから導かれている。特に、その内容が明確でない監査人の職業的懐疑心の発揮のあり方について、その具体的な形態を実務的に実行可能な形で示していることの貢献は大きい。第二に、監査事例の分析を丁寧に行っていることも本研究の強みである。監査研究における事例の分析は、その重要性にもかかわらず、入手可能な情報が大きく制約されるため、一般にその実施に困難が伴う。本論文では、十分な情報の入手が比較的容易で、なおかつ本論文で取り上げる監査技術との関係で適切な事例をうまく選択し、そこに潜む監査技術上の問題を適切に浮かび上がらせている。

ただし、本論文にも課題がないわけではない。たとえば、合理化・マニュアル化の結果として、監査プロセスが本来あるべき流れとは逆の流れが生じているといった本論文の核となる議論において必ずしも十分に詳細な説明がなされていない。しかし、こうした課題は、今後の研究において十分に対応可能なものであり、本論文の価値を損なうものではない。

よって審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取扱により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。